

保育者の保育展開にみる環境構成要素の活用に関する事例的研究  
—アメリカにおいて

保育者 保育展開 アメリカ  
Classroom Management (クラス経営)

正会員 ○ 石垣 文 \*3  
Ben Refuerzo \*1  
正会員 小野田泰明 \*2

The aim of my study is about American Child care facilities, studying on classroom management by the caregivers. Recently in Japan, Child care facilities along with the quantity provision, the quality of the care and its evaluation are necessary. Still most of the caregivers have to decide the management by themselves and have few clear guidelines. Whereas from my observation, in the states, the caregivers are aware of the idea regarding 'Classroom Management' and know how to use the environmental resource to handle their classroom. Conclusions-Through this study I can say that in the states, the caregivers who have high literacy about classroom management apply space and interior factors to their care.

1. 背景と目的

建築計画分野における保育の扱いは、いわゆる園児の行為と環境、社会性との関わり等の子ども主体の記述として論じられる<sup>x1-3)</sup>ことが多かった。その一方で、実際の運営の現場では、保育者の資質、保育所の経営、そして保育政策といった異なる三層で同時に保育の質的内容や専門性の向上が問われるなど<sup>x4)</sup>、対象とすべき領域はより拡張している。

アメリカの先駆的保育所では、保育者の現場裁量を支援する意味で早くからクラス運営の方法やその環境づくり、遊具や教具の配置等を統合した「Classroom Management (クラス経営、以下CM)」<sup>x5,6)</sup>に取り組んでおり、保育の質的評価の面において幾度か日本に紹介されてきた<sup>x7)</sup>。本研究は、そうしたCMを導入しているアメリカの現場において、

保育者がどのように環境構成要素<sup>註1)</sup>を用いて保育を展開しているのかを明らかにしようとするものである。

2. 調査の概要 (表1)

3. 1日の保育の枠組み

各保育所での保育は主に①長時間を占めるFree Choice Activity (以下FCA) (活動を自由に選択)②Small Group Time (以下SGT) ③Large Group Time (以下LGT) (共に読み聞かせや課題への取り組み、音楽など)と④食事及び昼寝から構成され、屋内活動は主にクラスルームで行われる。多くのプログラムは屋内、外のFCA間にSGT、LGTが挿入される構成で進行する。

子ども達の活動集団の大きさは、その目的によって弾力

表1. 調査対象施設・方法の概要

施設名	A Child Care 研究教育機関付属	B Child Care 研究教育機関付属	C Child Care 医療機関付属
運営時間	7:30am-5:30pm	7:30am-5:30pm	7:00am-6:00pm
対象年齢	2ヶ月-6歳	2ヶ月-5歳	3ヶ月-5歳半
利用人数	115名	80名	56名
調査対象クラス <sup>註2)</sup>	2½-3½歳 22名 保育者4名 3-4歳 24名 保育者3名	18-33ヶ月 18名 保育者4-5名	2-3歳 22名 保育者4名 3-4歳 25名 保育者3-4名
調査日程	2004年2-3月 連続した3時間×7日間	2004年6月 連続した3時間×3日間	2004年4-5月 連続した2時間×10日間
所在地	アメリカ・カリフォルニア州		
調査方法	パンフレット、Staff Handbook等CM理念の分かるもの入手 参与観察調査 園長・保育者へのヒアリングおよびアンケート調査		

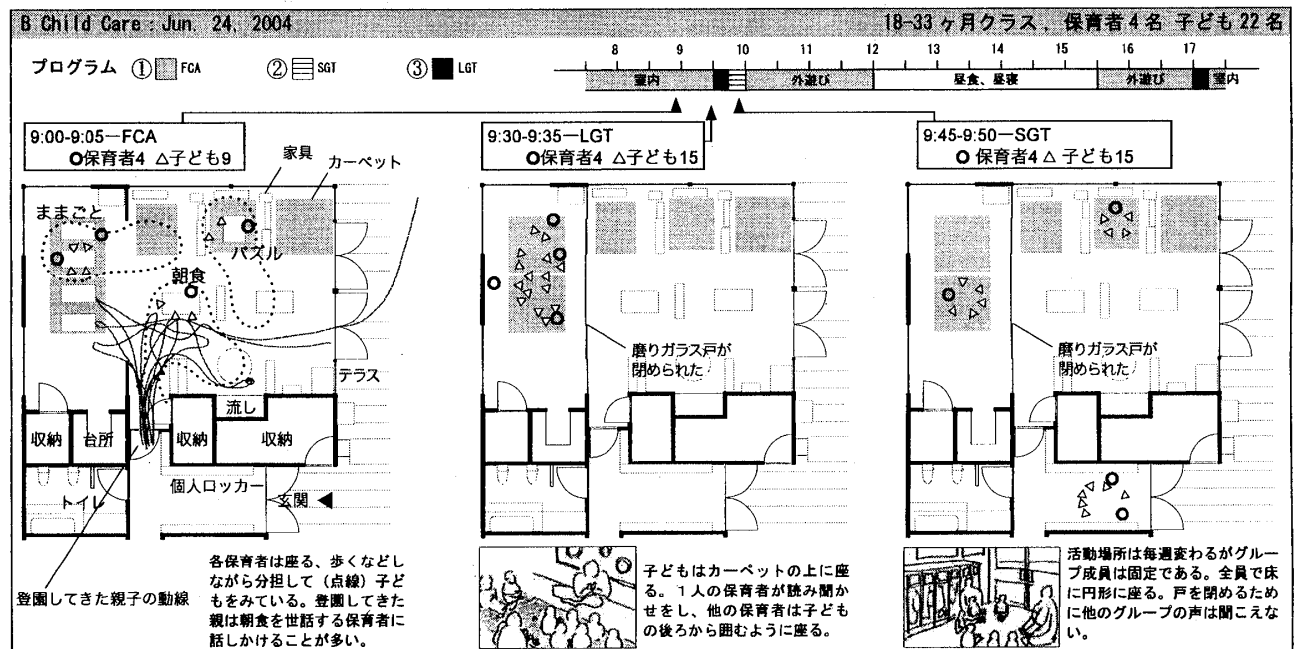


図1. 1日の保育の枠組みの抽出事例

Case Study of Utilization of Environmental Resource on Care Giving by the Staff - in the States

ISHIGAKI Aya, REFUERZO Ben, ONODA Yasuaki

的に変化し、場所の選定や子どもの居方が保育者によって慎重にコントロールされることで子どもの活動への関わりが保障されている。特にSGTではグループの担当保育者と子ども達の関係を深めるために、間仕切りや独立した玄関、家具で仕切られた小さな空間等が活用され、各グループの独立性はうまく保たれていた(図1)。

こうしたスムーズなプログラムの展開は実際には空間、設え、保育者のリテラシーが動的に関わり合って担保されている。以下それぞれについて示す。

#### 4. 保育展開のための要素

**4-1. 空間の活用** 活動内容や場所、集団の大きさが増えるために、プログラムの変わり目は子ども達が騒然とした雰囲気包まれやすく、「次の活動へ心と体を切り替える余地をつくる」ための細やかな対応が求められる。実際にA Child Careの事例(図2)では、外遊びの終わりに向けた準備(図2④、⑤)、半屋外でのLGT(同⑥)、さらに一人ずつ名前を呼び屋内へ移動させた後のLGT(同⑦)と、段階的な活動の移行が確認されている<sup>註3)</sup>。屋外に用意された静かな場所や、屋内と屋外とのゆるやかな境界面の設定等がその展開に寄与しているようである。

**4-2. 設えの役割** FCAでは子どもが個人単位で活動するため、騒音やトラブルが発生しやすく、子どもの安定した活動が妨げられがちである。保育者はそれらを最小限に抑えるために設えを活用することが多い。具体的には可動家具やサインにより使用可・不可を示す(図3)、使用しないエリアを消灯するなどの行為である。また、こうした設えを用いたメッセージの視覚化は、コミュニケーション能力が低い子どもに対して特に有効だと考えられていることが保育者のヒアリングから確認されている。

**4-3. 保育者のリテラシー** 保育者によるこのような動的なプログラム運用を保障する目的でCMが活用されており、ハンドブック<sup>文8)</sup>には、各プログラムの内容のみならず、空間の活用から身体的な振る舞いに到るまで細かな記述が

なされている。

#### 5. まとめ

CMの実体ともいえる保育者のリテラシーと、それに支えられた空間や設えの総合的な活用によってスムーズな保育展開が担保されている状況を具体的に把握できた。

註1) 本研究では、物理的な要素と運営的な要素を環境構成要素として捉える。  
 註2) 今回は、対人関係が深まり、活動の中で重要となってゆく2-4歳クラスを対象とし、論ずる内容はクラスの年齢差に関わらず観察された事例とした。  
 註3) 年齢の低いクラスでは、より幅を持たせた活動の移行が設定されていた。

参考文献 文1) 藤田ら、幼稚園の遊び行為と構築環境の特性に関する考察、日本建築学会大会梗概集、1999.09. E-1 p203-204 文2) 佐藤ら、園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察、日本建築学会計画系論文集 第562号 P.151-156、2002.12 文3) 福本ら、保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究その1~3、日本建築学会大会梗概集、2003.09. E-1 p1075-1080 文4) 浅井春夫著『子どもの権利と「保育の質」』かもがわ出版、2003 文5) Sandra, C. (1992). Managing the Early Childhood Classroom. Young Children, Jan. 23-29. 文6) 森上史朗、柏目女壺峰編『保育用語辞典』ミネルヴァ書房、2000 文7) 金田利子、諏訪きぬ、土方弘子編著『「保育の質」の探求—「保育者—子ども関係」を軸として』ミネルヴァ書房、2000 文8) UCLA Child Care Services STAFF HANDBOOK 2001-2002

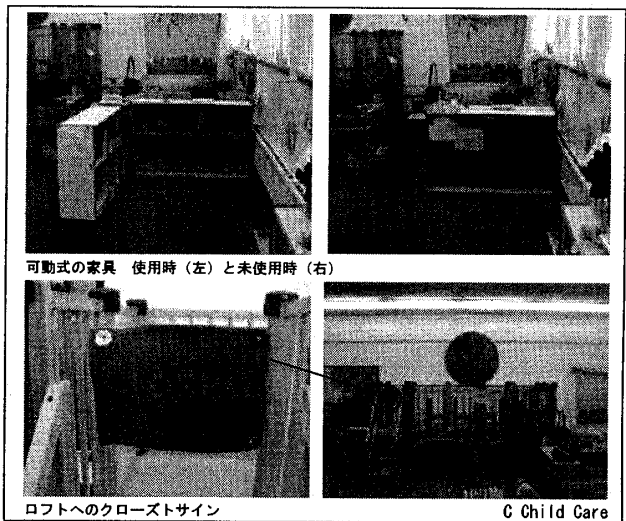


図3. 視覚化されたメッセージ

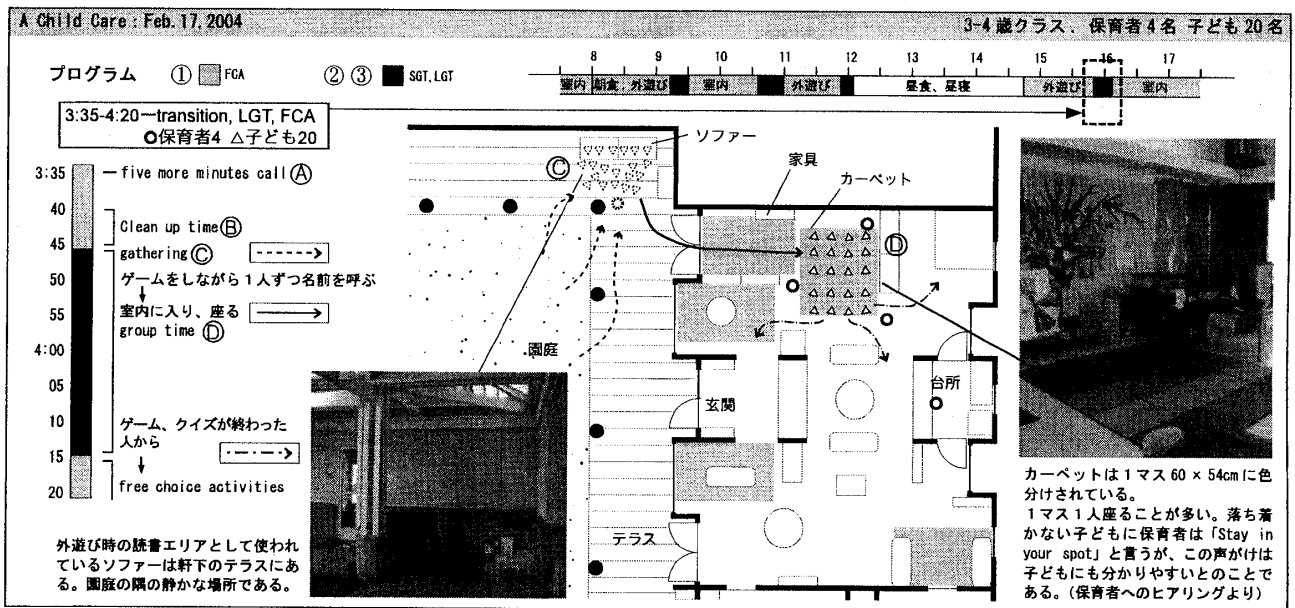


図2. 活動移行の抽出事例

\*1 University of California, Los Angeles 教授・建修  
 \*2 東北大学大学院工学研究科 助教授・博士(工学)  
 \*3 東北大学大学院工学研究科 工修

Prof., University of California, Los Angeles, M.ARCH  
 Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr.Eng.  
 Graduate School of Engineering, Tohoku University, M.Eng.